



彼は破廉恥な秘書

試し読み

俺の会社の社長秘書はエロい。

かつちりスーツを着た男だし、とくに顔が端正なわけでも、色気むんむんなナイスボディなわけでもなし、社長の引き立て役に徹して、控えめで存在感がうすいし。

が、指先まで神経がいき届いているような丁寧な所作や、すこし影がある、表情の機微、しおらい言動やふるまいに、儂げな雰囲気「鞭打ちてええええ！」と歪んだ人の劣情を搔きたててやまないような。

なんて、よこしまなを目で秘書を見ているのは俺だけではない。

今日も今日とて「社長、また秘書さんの腰に手を回していたよ!」「いちいち、顔を寄せて話すの、なんかイヤラシイよね!」と女性社員たちが、ひそひそきやつきやつきしている。

そこはかたなく色っぽい秘書と、五十代にして独身、若若しく元気溘刺な社長。

ふだん彼らの距離が近いのと、もともとスキンシップをしたがる社長が、セクハラレベルに秘書を触りまくっていることで、デキているとの噂が絶えないのだ。

「ほほう、あの社長は堅物かと思っていたが、婀娜っぽい秘書を寄こして揺さぶってくるとは、なかなか食えないヤツだな。

さんざん自分がふだん、食いちらかしているだろう秘書を・・・舐められたものだ。

ふん、まあいい。どれほど調教されているか、お手並み拝見といこうか。どうせなら、わたしの趣味につきあわせて、逆におまえの体を快樂によつて籠絡してやろう」

「あう、はあう・・・！かい、あ、ああ、かいちよ・・・！ちが、う、ん、あん！はあ、ああ、かい、ちよお、おやめ、を・・・！」

糊のきいたスーツの上から緊縛と会長の趣味丸だし。

会長が紐を引っぱるたび、とくに股間がきつく食いこんで、盛りあがった布の染みが広がり。

専務は秘書を自分に寄りかからせ、両手で足を広げている。

会長の言葉責めとともに、耳に猛攻をかけ、盛んにレロレロしゃぶしゃぶ。

『おやめを』とはな。あくまでウブでイタイケなふりをして、わたしを煽りおって、なんともタチのワルイ淫乱な秘書よ……。

おまえが、しばらくつくれるなら、それでもよい。

社長の遅刻を詫びて、わたしのを慰めるがよい」

会長が着物の裾を割り、お目見えした、剥きだしのそそり立った巨根。

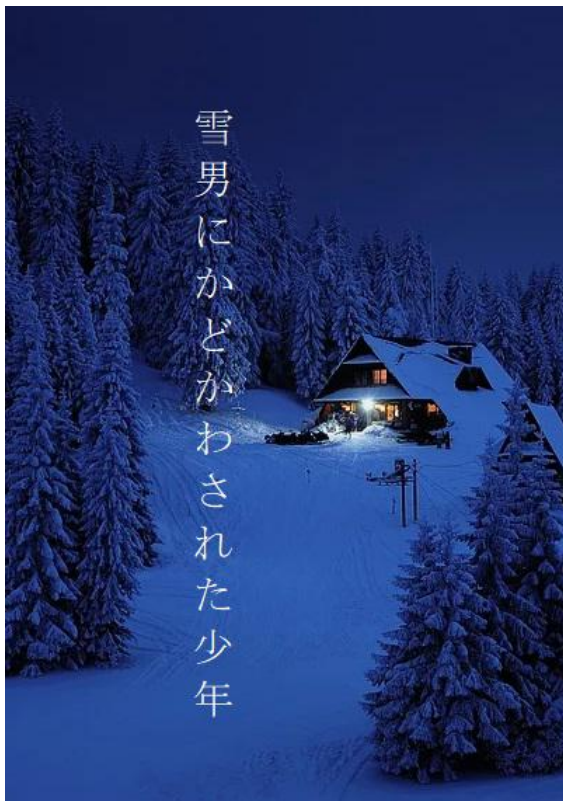
紐でひっぱられて、まえに倒れながら「はあ、おつき・・・」と湿った吐息をし、命令どおり舐めだす。

「はあう、くあ、っはあ・・・はん、あ、あう、う、かい、ちよ・・・あく、うあ、かいちよお・・・」

はじめは、おそろおそろ舌を滑らせるだけだったのが、しゃぶりだして、深く啜えこみ、大胆になるにつれ、盛んに体をくねらせて。

揺れることで体中に巻きついた紐に、乳首や股間が摩擦して、しゃぶしゃぶあんあん。

雪男にかどかわされた少年



俺の家は山奥にあり、冬になると雪に閉ざされる。

冬休みともなれば、隣家に行くのも手間と時間がかかるとあって、人の訪問はほぼなく、俺にしる犬の散歩以外、あまり外を出歩かないに、ヒキコモリ状態。

ただ、今年の冬は、遭難した雪男を拾った。

浮気をして雪女にお灸をすえられたとかで、復活まで時間がかかるらしい。今は納屋にある業務用冷凍庫のなかで、ミニ雪だるま姿で充電中。

放っておくと「さびしくて死ぬ死ぬ死ぬしぬ！」と一日中絶叫し、冷凍庫のなかで暴れまわるので、しかたなく、たびたび会いにいき話し相手に。それにしても、未成年の中学生をつかまえて、セクハラ発言がひどい。

浮気に怒ったというのなら、雪女が恋人か、妻なのではないのか。

「童貞シヨタチンポうまいだろうな！なあ、先っぽ、先っぽでいいから……！」

「配達のお兄さんの・・・！」と頬をかつとさせると、制服の下を想像していた通りの巨根が、俺のを押し倒してずりずり。

「は、あ、やめ、雪、男！あ、あ、あ、だ、め、あう、や、やあ、配達、の、お兄さんのお、ああ、あん、だめえ・・・！」

ぬちぬちと水音が耳につくし、雪男はにやにやと舌舐めずして、見下ろしているし。

涙で視界が滲み、配達のお兄さんが、俺の痴態をじっくり眺めているように見えるし「シヨタのイクとこ見せてよ」と云われて死にたいほど恥ずかしいし。

とても堪えきれずに「あう、も、もう、あん、あん、くう、く、そ・・・
ひゃあ、あああん！」と着衣のまま射精。

息を切らしぐったりとするのに、手を休めてくれず「うわあ、ぐつちやぐちや」と耳元で笑い、濡れた股をぬちゆぬちゆと揉みしだく。

「イッタときの顔はサイコーにエッチだったけど、あまり自分でナオニしないのかなあ？

じゃあ、溜まりに溜まった童貞シヨタの精液、ぺろぺろちゅうちゅう舐めて吸いつくしてやるよ」

お昼寝時間の
お医者さんごっこ



幼稚園児のころ、お昼寝の時間をひそかなタノシミにしていた。

セイカクニは、同じ組の佐原が隣になるのを、だ。

とって、とくに親しかったわけでないから「並んで寝よ」をお誘いをせず。

「たまたま」隣になるのを期待して。

佐原が隣で寝ると、どうなるのか。

部屋の電灯が消され、しばらくして目覚める。

で、隣の人の布団をめくり「お医者さんごっこ」とするのだ。

親が医者だからか「今日はどうしました」といかにも、それっぽい文言を囁きながら「イタイのは、ここですか？それとも、ここですか？」と体中を触診。

寝たふりをし、くすぐったいのを堪えて佐原の「お医者さんごっこ」につきあうのがオモシロかったのもあるが、あとから思えば、性の目覚めの前段階だったと思う。

横わったままの体中まさぐられて、なんとなく気もちいのが癖になり、お昼寝の時間が近づくたび「今日は隣かな」とそわそわわくわくしていたわけ。

「んっ、う！」と甲高く鳴き、体を痙攣させるも、聴診器のイタズラはいけいけどんどん。

「おや、なんだ、このシコリは？」と念入りに調べるように撫でて、擦つて、押しつぶして「なんと、こちらにもシコリが！」ともう片方を、さらに強く聴診器ですりすり。

「はっ・・・あ、ん・・・く、あ・・・ああ・・・」

口をふさいでも、漏れ聞こえる悩ましい喘ぎ。

恥ずかしくも、もどかしくて、淫らにくねらせてしまう体。

ズボンの膨らみの染みを広げ、くちくちと水音をたてるのが、静かな部屋では、いやでも耳につくだろうに「ああ、どうしたことだ、さらに腫れている！」と聴診器で乳首をイジメつつける。

ガマンしきれず、ズボンに手を伸ばそうとしたら、目ざとく察したのか。「どうかな？下半身はダイジョウブだろうか？」と聴診器を胸に当てつつ、もう片手をパンツのなかへ突入。

乳首に聴診器を擦りつけられながら、パンツのなかで暴れる手で、ぐちゃぐちゃぬちやちや先走りをかき混ぜられ「ひやあん、ああ・・・！」ととても声をふさぎきれず。

「はう、あ、あん、あん、やあ、ちよ、しんき、ああ、はあん、だ、め、

だめえ・・・！」

「おお、ここも固く腫れあがって、かちかちで体液がダダ漏れだな。ん？なにが原因なのかな？ここかな？それとも、こっちな？」

女装

野郎たちの

夜の宴



俺は女装が似あう。

顔つきや体つきが男らしくなくなった高校生のころから（学園祭でチャイナドレスを着たのを皮切りに）むしろ、女装が定評となった。

とくに顔が端正でも、女らしいナイスバディでも、肌が白く艶やかでもないのだが・・・。

まあ、とにかく、俺が女装をしてパフォーマンスをすると、野郎どもが口笛を鳴らし手を叩き、酔った猿のようにはしゃぐのにはちがいない。

今回も、会社の忘年会で、ミニスカポリスに扮し「逮捕しちゃうぞ☆」とパンチラをするたび「おふう、もつとお！」「おとおお、おかわりい！」とふだんはお堅い課長までもが、跳びあがって嘸したて、鼻息荒くパンツをガン見。

女性社員が無表情で蔑視しているとも知らず。

ところで、女装が似あうことに、俺がどう思っているかといえよ。

抵抗がなければ、積極的でもなく、キライでもなければ、スキでもない。

ただ、こうして堅物の課長が、女性社員ドン引きの助平親父化するのにはオモシロいし。

酒の席で、セクハラやパワハラを横行するよりは、俺のパンチラで上司もイッショになって野郎どもが肩を組み、きやつきやつしてもらえれば、サイワイだと思ふ。

なんて、平和の使者のように考えていたのが甘かった。
酔っているだけでなく、頬を赤らめ息を乱す野郎どもに、自分がどう見られているのか、深く考えもせず・・・。

「あ、や、だ、だめえ、C Aの、ちんこ、ああ、あん、でつかく、しな、いでえ！あん、あん、あう、う、女子、高生が、ケーサ、ツ、舐め、た、ら、あとで、あ、や、やあん！あう、ああ、ああ、き、キツ、も、お願い、イカせてえ・・・！」

股に収納してあるちんこが、膨らみつつも、そそり立つことができずに、ツラくてしかたなくて、つい尻をふってオネダリ。

二人は止まってくれたとはいえ、股の収納には手をつけず。

大石は腰を持ち、尻の割れ目にちんこをすりすりしながら、奥まったところを指で広げはじめた。

細谷は乳首をいじりつつ、スカートをめくりあげたら、ぎんぎんに立った
それで、俺のスカートのなかをぐちゃぐちゃに。

「女子高生のおちんちんもいいでしょ？」「CAにミニスカポリスが開発
されるの、たまらないすね」と相かわらず、顔が赤らむような卑猥な囁き
をして、耳をしやぶしやぶ。

「ば、かあ！俺、イ、キたいのに・・・！おちん、ちん、もう、ああ、だ、
め、きつい、のお！あ、あ、あ、あん！ば、かあ！気もち、よくしな、ふ
あ、あう、あ、俺、頭、おかし、くなっちゃ・・・！CA、とお、女子高、
生に、こんな、俺、も、やだ、やだあ・・・！」

拘束されたまま膨張するばかりで、ちんこがもげるかと思ったほど。

やだやだあんあん号泣すると、さすがに二人は思いとどまってくれ、収

納されたちんこを解放してくれた。

あと一息、胸の突起をつつかれたら、イキそうだったものの「く、ふふ……
じゃあ、まずはC Aに強姦されるミニスカポリスですね」と細谷がスマホ
をかまえて。

